

11/12 (水) 第7回 校内研修会 (三郡同研究推進校研究発表会)

○2年生

2年生では、「統一応募用紙の制定」を入りに、歴史的な背景を学びながら水平社設立に至るまでを本時まで学習をしました。そして、本時では「水平社宣言」を読み、西光万吉たちの思いを理解し、この宣言が部落民だけの幸せや解放を望んでいるものではなく、全ての人たちに対して向けられたものであることに気付かせるという内容でした。

事後研修会では、道徳という教科の難しさ、また学びの共同体の在り方について様々な議論が交わされました。また、教師と生徒だけでなく、生徒と生徒のつながりにもっと重点を置くと良かったのではという意見が多くグループから出ました。教師はあくまで“つなぎ役”に徹するということの大切さを再認識する機会となりました。

<各グループから>

- ・教師が机間観察をし、生徒を意図的に指名することができていて良かった。
- ・気になる生徒がいたが、周りの女子のフォローで参加できていた。
- ・グループになることで、助けられる生徒がいた。
- ・特定の生徒に突込みすぎて、やりとりが長かった。
→グループにもどし、教師と生徒ではなく、生徒と生徒をつなげればもっと深まった。
- ・教材にしっかりもどすことができていて良かった。
- ・「西光万吉さんが頑張ってくれたおかげで…」と今は差別がないと思っている生徒がいるのも事実。
→今後の指導につなげていく。(第8時で実施)
- ・道徳での学びの共同体の在り方を考えていかななくてはならない。
- ・前半は生徒同士でつながりそうだった。



<松本先生より>

まず、道徳の授業についてのお話をいただきました。そもそも学びの共同体に明確な形はなく、『「個」で始まり、人と関わる中で学びを増やし、「個」に戻る』のが道徳であるとのことでした。したがって、それに準じた指導であり、生徒の実態に合わせてさまざまな手法を考え、生徒たちに何を学ばせたいかを明確にして臨むことが大切であるとのことでした。

また、教師はつなぎにいかねばならないとのご指摘もいただきました。例えば、グループを飛び越えるのではなく、グループ内で関わるように教師がアシストをする。そして、よく話す生徒を指名するのではなく、その話をいろいろ聞いてきた生徒を指名するなどさまざまな形で生徒たちをつなぐ、とのことでした。これは道徳に限らず、どの教科でも同じことが言えると思います。

同僚性についてもお話をいただきました。2年生は水平社を学ぶにあたって、まず学年で奈良県の水平社博物館を訪れました。そこで、博物館はもちろん、西光寺やその土地の風土に触れ、生の学びをしてきました。このように、教員間での学びがよりよい授業をするためには必要不可欠であり、この同僚性が質の高い学びにつながるとのことでした。



今回の公開授業、あるいはそれまでの取り組みを通して、道徳という教科の特性について改めて考えさせられました。また、学びの共同体としてどのように取り組むか、グループ学習のタイミングや発問の設定など様々な点で、学年で何度も検討しました。そして、今回の事後研修会を終えて、自身はもちろんですが、学年としても新たな学びが生まれ、ジャンプ課題を一つクリアしたような気がします。これをまたさらに昇華させ、生徒たちの学びに還元できるようにしていきたいと思います。